

# ポオとボオドレール

——「エドガア・ポオ論」(1852年) 覚え書 ——

江口裕子

エドガア・ポオに世界の古典的作家の地位をあたえたのはアメリカ本国ではなくフランスであり、十七年にわたる長い年月の間うむことなくポオの訳に心血を注いで「フランスではポオは大人物にならなくてはならぬ」という彼自身の当初の念願をまさしく成就したのはボオドレールであった。ボオドレールがポオを発見した 1840 年代の終りに近い頃、ポオは心身を消耗しきって、それでも尚各所に講演旅行に行き、彼の終生の夢であった文芸雑誌刊行のための資金ぐりに最後の努力をしていた。ポオはボオドレールに見いだされたことを知らず、又ボオドレールはポオに手紙を書きおくれたこともなく、二人は海をへだてて遂に相見える機会なしに終わった。しかしアメリカ本国で消えかかっていたこの天才的作家の生命にもう一度火を点じ、彼の文学的精髓を余す所なく吸収摂取することによって、いわば彼の精神的双生児と合体することによって、ポオをフランスの文学伝統の中に導き入れ、今日のように自国の古典的作家と同等の地位をあたえたボオドレールの功績は高く買われるべきである。ボオドレールの生涯をとおしてのポオへの私淑は文学史上例を見ないものであり、その結果としての彼の訳業は、たとえ彼が「悪の華」を書かなかったとしても、ボオドレールの文学的業績の中で不朽の光輝を放つものであろう。

ポオの人とその作家の本質をより深くより偏見なく理解していたのはフランス人であるという、ポオを依然として高く評価しない英米の批評家への反論となる。勿論フランスでも当初からポオを黙殺し、敬遠する人たちも少なからずおり、又英米でもポオを熱烈に支持し、彼の作品にすぐれた洞察をしていた人たちもいなかったわけではない。しかしペリ・ミラー

Perry Miller の考えたようにポオは「フランス人の想像がつくりあげた神話的存在」にすぎないのかどうか。たしかにボオドレールにとってポオは聖化され偶像視されていた。ボオドレールが母オーピック夫人に書きおくれた「ぼくはいつもあなたの中に生きていました。あなたはぼくだけのものでした。偶像でもあり友人でもあったのです。」<sup>1</sup> という言葉を、彼はポオにもそのまま献げることができたであろう。サルトルがいうように、死んでいたからこそポオは完璧なボオドレール自身の肖像となり神格化されることが容易となった。唯我主義者であったボオドレールは彼の心の聖堂のなかにポオをみちびき入れて殉教者の列に加え、いわば聖化された自己の肖像に思いこがれ、祈りを捧げたのだ。<sup>2</sup> しかしこのナルシシズム、この完璧な自己投入がなければボオドレールはポオに生命を吹きこむことはできなかつたであろう。

今日のポオ研究は、ポオを見いだした当初から彼に向けられたフランス人の深い関心の秘密がどこにあるのか、彼らのポオに対する視点が何であるかを究めることが重要な課題の一つである。そしてその淵源を辿ればやはりボオドレールのポオとの決定的な出会いに行きつく。そして彼がポオを発見して以来、「我こそ創始者！」“moi, l'initiateur!” と確信にみちて名乗ることが出来るまでには、ポオを我がものとするための苦心惨たんたる年月があり、この言葉はとりも直さずすべての競争者を退けてポオに関する第一人者となったボオドレールの勝利の宣言にほかならなかつた。今日ポオとボオドレールの関係は尚双方の研究者によって探究され、新しい事実の発見や修正が加えられつつある。この小論では私に分るかぎりの材料によって、ポオがフランスの文壇に受け入れられた初期の諸般の事情と、ボオドレールの役割についてその一端を再検討したい。

ボオドレールがまだ何者かをヨーロッパで殆ど知られていなかったポオ

<sup>1</sup> Letter to Mme Aupick, 1861年5月6日。

<sup>2</sup> “...Faire tous les matins ma prière à Dieu, réservoir de toute force et de toute justice, à mon père, à Mariette et à Poe comme intercesseurs.” (*Fussées*, XXI).

を発見したのは何時頃のことであったか、確実な日附を伝える証拠はないが、ほぼ 1846 年か 1847 年、即ちポオの死に先立つ僅か二三年前のことである。ポオドレールの伝記作者シャルル・アスリノー Charles Asselineau の回想にもとづいたルモニエ Léon Lemonnier, キャンビエール C. L. Cambière 等の推定によれば 1847 年一月廿七日 *Démocratie Pacifique* に載ったイサベル・ムーニエ夫人 Mme Isabelle Meunier の仏訳「黒猫」*Le Chat noir* によってであろうというのが定説となっている。これを裏づけるものの一つに、ポオドレールが 1858 年アルマン・フレッス Armand Fraisse にあてた手紙がある。その中で彼は

ぼくは 1846 年か 1847 年にエドガア・ポオのいくつかの断片を知りました。ぼくは異様な心の激動をおぼえました。彼の全作品は彼の死後にやっと一つの版にまとめられた位で、ぼくはエドガア・ポオの編集していた新聞のコレクションを借りるためにパリに住んでいるアメリカ人にわざわざわたりをつけたくらいです。その時、信じて欲しいのですが、ぼくはかねて莫然とまとまりもなく、無秩序のままに考えていたことを、すでにポオが巧みに結合して、完璧なものにすることが出来ていた詩と物語を見いだしたのです。

とのべて、この未知のアメリカ作家の発見に運命的な出会いをみ出したことを伝えている。しかしポオの作品がフランスに紹介されたのはこれ以前のことであり、ポオ自身が知らない中に原作の模倣や翻案が幾つかフランス国内の雑誌に掲載されていた。当時はまだ国際著作権法が確立していなかったため、他国の作家の作品を翻案して自分の作のようにして発表することがあたり前のように行われていた。フランスの文壇に現われた最初のポオの作品はこれまでは 1845 年八月に *Le Magasin Pittoresque* 紙上に載った「盗まれた手紙」*Le Lettre volée* の翻案であるとされていた。之にはポオの名前も翻案者の名前も付けられていなかった。しかしこれより以前 1844 年に「ウィリアム・ウィルソン」の翻案が *La Quotidienne* 紙上に James Dixon, 副題として *la funeste ressemblance* という題名で現われ、作者は G. B. という頭文字のみで示されていたことが明らかになっ

ている。<sup>1</sup> ポオの名前が最初に明記されたのは 1845 年十一月 *La Revue Britannique* に「こがね虫」の仏訳が現われたときで訳者は A. B. と署名され、Les Contes de M. E. Poe, Américain, dont nous avons voulu donner une idée aux lecteurs de la “Revue Britannique” ont été imprimés en un volume après avoir paru successivement dans un Magazine des États Unis. と附記されていた。同誌には 1852 年九月 L’Aéronaute hollandais という題名で署名のないポオの作品「ハンス・プファールの冒険」の翻訳が載ったが、これがやはり A. B. の手によるものであることが判明した。翌 1853 年 Hachette 社から *Nouvelles choisies d’Edgar Poe* という選集が始めて出、内容は先の「こがね虫」と「ハンス・プファール」であり、訳者は Alphonse Borghers と記されていたからである。A. B. すなわち Alphonse Borghers という人物が何者であるかはポオ研究家のセイラズ Louis Seylaz, キャンビエール、ルモニエ等によっても究明されるに至らなかったが、最近 A. B. とは実在の人ではなく、当時 *La Revue Britannique* の編集者で出版界でも有力者であったアメデ・ピシヨール Amédée Pichot の覆面であったことがバンディ W. T. Bandy 教授によって明らかにされている。<sup>2</sup> 1846 年九月には同じく *La Revue Britannique* に「大渦に呑まれて」Une Descente au Maëlstrom の訳が掲載され、訳者は O. N., 脚註には Cet article est de M. Edgar Poe, auteur Américain dont nous avons publié le *Scarabée d’or*. とあった。即ちポオの作であることを明らかにした最初の訳はボルジュール訳の「こがね虫」、ついで O. N. の「大渦に呑まれて」である。O. N. とは 1846 年のパリ市を一時賑わした「モルグ街の殺人」の二つの翻案をめぐる訴訟事件の渦中の人物 Old Nick こと本名 Emile Forgues である。同年六月十一日から十三日にかけてパリの新聞 *La Quotidienne* に *Un Meurtre sans exemple dans les Fastes de la Justice, histoire trouvée dans les papiers d’un Américain*.

<sup>1</sup> W. T. Bandy: “Baudelaire et Edgar Poe, vue rétrospective.” *Revue de Littérature Comparée*, 41<sup>e</sup>, 1969, p. 182.

<sup>2</sup> *Ibid.*, p. 183.

という物語が掲載され、筆者は G.B. と記されていた。所が四ヶ月後の十月十二日 *Le Commerce* 新聞に *Une sanglante Enigme* と題する作品が O.N. の名で現われた。が内容が前記の作品と全く同一であった所から問題がおこった。O.N. こと本名フォルグは先に *La Presse* 新聞を剽窃のかどで責めたことがあったため、同紙は報復の好機来れりとばかり、フォルグの物語は *La Quotidienne* に載った G.B. の作品の剽窃であると告発した。O.N. はこれを否認して、作品の原本は二つ共エドガア・ポオというアメリカの作家のものであると自己弁護と *La Presse* 紙への非難を含めた声明文を *Le Commerce* と *Le National* に送り *La Presse* がこの文を公表するように要求した。*La Presse* はこれを拒否したためフォルグは同紙を相手どって告訴するに至った。結局この事件はフォルグの敗訴となったのだが、原作者ポオの名前はかえてこの事件のためにフランス国内に広く知られることとなり、フォルグはポオのためにとんだ怪我の功名を立てることとなった。

この事件は風の便りにポオの耳にも入ったらしく、彼は同年の暮に E. Duyckinck にあてた手紙の中で「クレム夫人が今朝私にパリの新聞が私の『モルグ街の殺人』のことを話していると言いました云々」と語っている。フォルグは 1846 年十月 *Revue des Deux Mondes* にその前年アメリカで出版された Wiley and Putnam 版のポオの「作品集」*Tales by Edgar Allan Poe* に対する長文の評論を寄せた。Etudes sur le roman anglais et américain がそれであり、フランスにおける最初のポオ批評となった。(拙論「フランスにおけるポオ評価の展望」東京女子大学比較文化研究所「紀要」1972 年三月、参照)

上のようなポオの「モルグ街の殺人」の剽窃をめぐる訴訟事件や、フォルグのポオ批評によって少くともポオの名前や作品のことが、当時パリに住んでいたボオドレールの耳に入らなかったとは考えられない。彼が後日フォルグのことを〈赤裸の心〉の中で「海賊、剽窃屋のフォルグ」と罵っているのもこの事件に関連させて記憶していたものと見てよいであろう。とも角この事件が引き金となって 1846 年頃からポオの名前は漸くフラン

スの読者の注目する所となり、次々とポオの作品の翻訳が出はじめた。1847年一月廿七日には *La Démocratie Pacifique* という社会主義系の新聞にムーニエ夫人の訳「黒猫」、一月三十一日に「モルグ街の殺人」、七月三日「エイロスとチャーミオンの会話」、九月二十四日・二十五日「大渦に吞まれて」が次々と現われた。最後の訳は「こがね虫」(1848年三月二十三日—二十五日)である。

ムーニエ夫人(1822-1894)は本名を Isabella-Mary Hack というイギリス人で20歳のとき、社会主義者フーリエ F. Fourier の弟子であったヴィクトル・ムーニエ Victor Meunier というフランス人と結婚し、少年文学をもって知られていた人である。夫人の訳は1845年版の「作品集」を底本としたものと思われ、各所に削除があるのが難点だったが、作品はよく秀逸な作をえらび、文体も優美で気がきいた訳であったため、これまでの翻案物とはことなり、本格的なポオ作品の紹介に貢献する所が多であった。とくに「黒猫」と「エイロスとチャーミオン」はフランスでの初訳であり、後者はサント・ブーヴ Ch. Sainte-Beuve の関心を惹き、前者はのちにポオドレールをして「いささかなりとも文学に通じたパリの作家で『黒猫』を読んだことがないという人がいるだろうか」といわせたほどで、ムーニエ夫人の訳はポオの名前と作品をフランスに広く知らせることとなった。

ポオドレールがポオを知るまでには以上のような状況が準備されていたわけで、1847年までにはフランス国内にはこのユニークなアメリカ作家ポオに関心を抱く新奇な物好きのジャーナリストや、翻訳家が少なからず居り、無署名、ペンネーム、頭文字などで本名を秘して原作者の知らない中に翻訳や翻案を半ば公然と出版していたのである。G. B., フォルグ、ボルジュール、ムーニエ夫人はすでにポオドレールに先鞭をつけて居り、レオン・ド・ウェイリー Léon de Wailly、ウィリアム・ヒューズ William Hughes などという翻訳家が1850年代にはポオドレールの競争者として現われていた。尚、前述の訴訟事件のもととなった「モルグ街の殺人」の訳者 G. B. という覆面の人物は1844年に早くも「ウィリアム・ウィル

ソン」の翻案を出した人であり、おそらく最も初期にポオを発見し関心を抱いた人というべきだが、この G.B. なる人物の正体は最近まで判明しなかった。が彼は *La Quotidienne* に約七年間ほど関係し寄稿していたボルドー人 Gustave Brunet という精力的な著述家で当時名前もよく知られた文壇きっての書物通であったことが今日では明らかにされている。<sup>1</sup>

ポオドレールが手がけた最初のポオの訳は「催眠術の啓示」であり、1848年七月十五日 *La Liberté de Panser* に掲載された。しかし当時のパリは二月革命直後のことで世を挙げて政治問題に没頭していた時期であり、又この作品が凡庸な作であった故もあってポオドレールの訳は殆ど世人の注意を惹かなかつた。

伝記作者アスリノーによれば、ムーニエ夫人の訳によってポオを知って以来、ポオドレールのポオへの傾倒ぶりは異常なほどで、相手かまわずポオのことを語り、彼の物語を暗誦して聞かせ、ポオでなければ夜も日もあけぬという有様であり、又ポオについての情報や資料をうるためにはどのような苦勞もいとわず、又英語とくに日常的会話に通暁するためにリヴォリ街のイギリス人の経営する酒場に出入りして、そこの主人を常日頃英語の顧問格としていたというような様々な逸話が残っている。ポオドレールのポオへの心酔ぶりを示す逸話の一つをあげれば、ある日ポオドレールはさるアメリカの文学者がパリに来ていることを知って、直ちにアスリノーと共にホテルへ面会に行った。客の部屋へ行くと彼は靴を購入中でズボン下にワイシャツという恰好で靴屋を前にいろいろな靴を試めしていた。ポオドレールがポオのことについて質問を始めた所、その男はポオについてあまり好意的でなく、ポオは奇矯な精神の持主で、筋道の通った話をしない男だなどと言った。ポオドレールは憤然としてその場を去り、階段の所で、彼への無限の侮蔑をこめて「ヤンキーってのはあいつのことさ！」と吐き出すようにいったという。私共が知る限りでは以上のようにポオドレールの誇張され浪漫化されたとも思えるポオへの傾倒ぶりはもっぱらポオド

<sup>1</sup> W. T. Bandy: "Baudelaire et Poe: vers une nouvelle mise au point." *Revue d'Histoire Littéraire de la France*, 67<sup>e</sup>, 1967, p. 332.

レールの伝記作者でもあり、親友でもあったアスリノーの伝記に全面的に依拠しており、ムーニエ夫人のポオ訳を読んだ 1847 年以後のことであったように伝えられているが、果してその直後のことであったか否かについて確実な証拠はなく、むしろ 1851 年以後のことであったと考える方が妥当であろう。何故ならポオドレールの最初の訳「催眠術の啓示」(1848 年)と、二番目の訳「ベレニス」(1852 年四月十七日)及び *Revue de Paris* に発表された最初の「ポオ論」Edgar Poe, sa vie et ses ouvrages (1852 年三月・四月)との間には四年のひらきがあり、それ以後彼のポオ作品の訳が続々と出始めた所を見ると、この四年間はポオとポオドレールの関係の醗酵期ともいべき期間であり、「催眠術の啓示」の訳を手がけてみて自分の英語力の足りないことを覚り、改めて語学の勉強に取りかかった時期であったろうと思われるからである。ポオドレールが幼少の頃ロンドン生れの母、のちのオーピック將軍夫人に英語を学んだことは確かであるが、その後リヨンの中学で英語を学んだとしても、抜群の成績であったのはラテン語で英語ではなかった。ポオの作品に始めて接した時からポオをよりよく理解するために、一意専心語学力の回復につとめたことは、その後の母への手紙の中の「ぼくは英語を随分忘れていたので仕事は一そう困難でした。でも今はとてもよく出来ます」(1852 年三月二十七日)という文面がそれをよく語っている。

ポオドレールがポオを発見した 1840 年代の末頃の彼の生活は不如意を極め、貧困、借財、差し押えなどが相次ぎ、又政治問題への参加や情人ジャンヌとのいざこざなども絡んで彼の私生活は甚だ不安定であった。そんな事情のためポオに関心を集中するまでに至らず、本格的に取り組むようになったのは 1851 年頃からであろう。この推定の根拠となるものに次のような宛名不明の書簡がある。

Je suis allé plusieurs fois chez Amédée Pichot, et enfin on a daigné me dire qu'il n'était pas à Paris. Faites donc demander à Londres, Au Plus Vite, ce livre si vous ne l'avez pas encore fait.

*Œuvres d'Edgar Poe, et surtout l'édition à notice nécrologique, s'il y en a une.*



(1851年10月15日)

このボオドレールが至急入手したいからロンドンから取寄せて欲しいと依頼している故人の伝記のついた作品集が、ポオの死後グリズウォルド Rufus W. Griswold が遺著管理人として時を移さず編集にかかり、翌1850年には彼の悪名高い“Memoir”を含んだ三巻本となって出版された Redfield 版「故エドガア・アラン・ポオ著作集」*The Works of the Late Edgar Allan Poe* を意味していたことは確かである。とすると1851年の秋までにボオドレールが所有していたポオ関係の資料は何であったか。1845年に出たウィリー・プトナム版の「作品集」やポオが生前関係していたアメリカの雑誌のコピーを若干はもっていたかも知れないが、このグリズウォルドの〈メモワール〉を附した最初の「著作集」をもっていなかったことはほぼ確実である。従って一般にポオ研究家によって信じられてきたように、翌年1852年三月から四月にかけて出たボオドレールの最初の「ポオ論」はレッドフィールド版の「著作集」及び〈メモワール〉に依拠しているという説の根拠は極めてあいまいとなる。実際ボオドレールの様々な伝記のなかで言及されているポオへの異常なまでの傾倒ぶりを証しするボオドレール自身の言葉はいずれも1852年以後のものである。例えば、「ぼくはぼくの中に信じられないほどの共感をかき立てた一人のアメリカの作家を発見しました」と母親に書きおくれた手紙の日附は1852年三月であり、「私はポオをフランス中に知らせたいと思います」(1854年七月二十四日)、また「アメリカでは大したものではないエドガア・ポオはフランスでは偉大な人物とならねばなりません。少なくともそれが私の望む所です」とサント・ブーヴに書きおくれたのは1856年三月十九日、前に述べたアルマン・フレッソにあてた手紙は1858年であり、また

私がこんなに根気よくポオを翻訳する理由がお分りでしょうか。彼が私に似ているからなのです。初めて彼の書物の一冊を明けたとき、私が夢想していた題目のみならず、前から考えていた文章を彼が二十年前に書いたことを発見して、私は驚喜したのです。

というテオフィル・トレ Théophile Thoré あての書簡ははるか下って

1866年頃である。

これらの証言を総合して考えると、ボオドレールのポオに対する関心は、1848年に「催眠術の啓示」を訳して以来身の煩瑣な事柄に紛れて暫らく下火となり、1851年頃再燃したと考える方が妥当で、それ以後のポオにたいする熱意と誠実さは終生変らなかつた。おそらくボオドレールは1849年ポオが死んだことを知り、死後出版されたレッドフィールド版のことも聞き知って前述のアメデ・ピシヨーのもとに幾度か足を運んで所在をたしかめようとしたが、面会することも資料を入手することも出来ず、急遽ロンドンから「著作集」を取り寄せるよう、恐らくどこかの書店に手配を頼んだのである。前述のようにアメデ・ピシヨーとは実は「こがね虫」の訳者ボルジュールと同一人物であり、1853年にフランスで最初の「ポオ選集」を出した人であることを思えば、いわばピシヨーにとってはボオドレールは手ごわい競争相手であったにちがいない。従ってピシヨーはボオドレールの意図を悟って故意にボオドレールとの面会を避けたのかも知れない。そう勘ぐる余地はある。一方ボオドレールが、「こがね虫」の訳者がフランスでは英語圏の国々の諸事情にかけては指導的な雑誌「英国評論」*La Revue Britannique*の編集長アメデ・ピシヨーであったことを知っていたかどうか確実ではないが、全く知らなかったとするきめ手はない。少くともピシヨーが新人作家ポオに関心をもち、彼の消息に通じた人物であることを知ってボオドレールはピシヨーに会い、ポオの訳業のことで「英国評論」と関係を結ぶことを望んだにも拘らず、ピシヨーが彼を素気なくはねつけたらしいことは前記の手紙から推量できる。所がそれより約一年後1852年九月に当の「英国評論」に匿名で「ハンス・プファールの冒険」の訳がのった。この覆面の訳者がボルジュールことアメデ・ピシヨーであったことは前にも述べた通りで、この作品はボオドレールが借りたいと思ってピシヨーの門を叩いた当の「著作集」の外には収録されていないものであった。このことがボオドレールを切齒扼腕させたであろうことは想像にかたくない。その年の十月十九日に彼が *Le Constitutionnelle* の所有者 Dr. Véron にあてた手紙はその間の消息を伝えていると思われる。

「もし『英国評論』があなたもご存知のように私をぺてんにかけなければ、万事注文通りに運んでいたでしょう」。

ボオドレーは「英国評論」から援助を得ることが出来なかったため、他の手段で何とかしてポオの生涯や作品についての情報や資料を得ようとして、パリ在住のアメリカ人や行きずりのアメリカ人の旅行者を探して東奔西走したのもこの頃からであったと思われる。所が幸運なことにボオドレーはポオが編集者をしていた「南部文学通信」*Southern Literary Messenger* やその他のアメリカ雑誌の報道記者としてパリに住んでいたアメリカ人 William Wilberforce Mann という人物に会うことが出来た。<sup>1</sup> しかも彼が同誌のコピーの大半をもっていたため、ボオドレーはたまたま願ってもない貴重な資料を手に入れることが出来、「南部文学通信」は 1852 年の「ポオ論」には重要な役割をつとめることになるのである。

ボオドレーのポオ論には「巴里評論」に載った最初の評伝「エドガア・ポオ。その生涯と作品」*Edgar Poe, sa vie et ses ouvrages* (1852)、「意想外の物語」*Histoires extraordinaires* (1856) の序文となった同名の評伝 *Edgar Poe, sa vie et ses œuvres*、「新意想外の物語」*Nouvelles histoires extraordinaires* (1857) の序文となった「エドガア・ポオについての新しい覚え書」*Notes nouvelles sur Edgar Poe* の三篇が主なものだが、1856 年版の「ポオ論」はその後ボオドレーの訳書がさまざまな版で出るたびについて廻り、より広く巷間に知られた「ポオ論」である。この二つの「ポオ論」の間には内容の全面的な変改があり、この四年の間にボオドレーのポオに関する知識と理解の度が長足に進んだことを示している。それは事実初稿「ポオ論」の原形を殆ど止めぬほど大幅に改められている。ボオドレー自身も 1856 年三月十五日、新しい彼の翻訳に添えてオーピック夫人におくった手紙の中で、「覚え書を読んで下さい——これはあなたの御存知のものではありません。初稿からは五十行もそのまま残って

<sup>1</sup> W. T. Bandy: “Baudelaire et Edgar Poe, vue rétrospective.” p. 187.

いません」と、誇らしげに語っている。

二つの「ポオ論」を比較してもっとも顕著な相違は初稿「ポオ論」の全体の構成を不均衡にしている長いポオ作品からの引用や、第三章にあたる作品論が全く削除されていること、今一つは 1852 年版で全く言及されていないグリズウォルドの死者に鞭打つての卑劣な中傷を 1856 年版では、極度な憤激と侮蔑でもって罵っている一方、新たにポオの晩年の女友達の一人であったフランシス・オスグッド Frances Osgood の回想記を引用してポオの擁護につとめている事である。ボオドレールはこの論の中でくり返してグリズウォルドの背信行為に触れ、彼を〈衒学的吸血鬼〉*pédagogue-vampire* と罵しり、「アメリカには犬どもに墓地への立入りを禁ずる法令は存在せぬのであろうか」となげいている。ボオドレールが 1852 年版「ポオ論」を書く前にグリズウォルドの〈メモワール〉を附した「著作集」を読んでいたら、なぜ彼は 1852 年版の中でグリズウォルドのことに触れなかったのか。ここで再び一般に信じられてきたように、初稿「ポオ論」の主なる材源となったのはレッドフィールド版「ポオ著作集」であったという根拠は非常に疑わしくなる。

シャルル・イリアルト Charles Yriarte はすでに 1870 年に、ボオドレールとグリズウォルドの間には文通があり、グリズウォルドはボオドレールにポオに関する資料を提供したという説を立てているが、コナール版「ボオドレール全集」*Œuvres complètes de Charles Baudelaire* の註釈者ジャック・クレペ Jacques Crépet はこれに基づいてもし両者の間に文通があったとしても、ボオドレールはポオに関する一次的な資料をグリズウォルドから期待していたために、1852 年版「ポオ論」でグリズウォルドの背信行為に言及することを差し控えていたのではないかと推定している。<sup>1</sup> しかし現在まで二人の間に文通があった証拠はなく、この点は解明されていない。1856 年版「ポオ論」の中でのグリズウォルドに対する憤激の烈しさから見るとこのクレペの推定にも疑問が残る。しかしこの疑問に終止符を

<sup>1</sup> *Histoires Extraordinaires par Edgar Poe, Notice, notes et éclaircissements de M. Jacques Crépet.* Louis Conard, Paris, 1932, p. 350.

打ったのはポオドレー研究の権威バンディ教授の最近の調査である。<sup>1</sup>

彼の調査によって初稿「ポオ論」の材源は従来信じられてきたレッドフィールド版「ポオ著作集」ではなく、その大部分がポオドレーが幸いにも入手することが出来た「南部文学通信」に掲載された二つの評論に依拠していることが明らかにされた。ポオドレーは 1852 年前に「著作集」を入手することは出来なかったし、従ってグリズウォルドの〈メモワール〉も読んでいなかったことは確実である。ポオドレーにより多くの材料をあたえているのはジョン・ダニエル John M. Daniel の書いた「ポオ著作集」の批評文<sup>2</sup>であり、今一つはジョン・R. トムソン John R. Thompson のポオの追悼文<sup>3</sup>である。ダニエルは「リッチモンド・エグザミネー」*Richmond Examiner* の編集長であり、ポオが晩年リッチモンドを訪れた折彼との間に理由の分らぬいさかいがあつて、ポオには含む所のある人物であつた。ダニエルの文章はポオの才能は高く評価しながら、故人の人間像に疑惑を植え付けるような印象をあたえるもので、中傷の意図のある点ではグリズウォルドの〈メモワール〉と軌を一にするものである。

ダニエルの文章は大別してポオの伝記的部分、容貌・態度・習慣等の描写及び作品論と三部に分れているが、ポオドレーのポオ論の半ば以上はダニエルの十五頁にわたる原文から借用されており、殆ど逐語訳といつてよいものである。ダニエルの伝記的部分は恐らく初めて鮮明なポオの個人像とその生涯の詳細をポオドレーに提供したもので、彼はこれ以上の資料を手元にもっていなかったと推定できる。従つてポオドレーは伝記的事実に関してダニエルがグリズウォルドの伝記中の誤まった記事にもとづいて記した事柄、たとえば年齢、ギリシャ行、ロシア入国等に関して全く同じ誤まちを犯している。一方ポオドレーはダニエルの綴るポオの伝記中、ポオのために不名誉となるような語句を削除したり修正をほどこしたりして、ポオドレーが望ましいと思うようなポオ像すなわち彼にたい

<sup>1</sup> W. T. Bandy: "New Light on Baudelaire and Poe." *Yale French Review*, N° 10, 1953, p. 65-69.

<sup>2</sup> "Edgar Allan Poe," *Southern Literary Messenger*, March, 1850.

<sup>3</sup> "The Late Edgar A. Poe," *Ibid.*, November, 1849.

して無理解であった、物質主義で低俗な民主々義国の犠牲となった〈呪われた詩人〉 *poète maudit* の肖像へと描き変えられているのである。ポオドレーはダニエルがもっとも陰険なやり方でポオ像を歪曲している部分を削除し、このように心ない仕打ちに出た伝記作者に対して反論と非難をもって報いているのである。削除された部分でダニエルはポオが養父ジョン・アランの二度目の妻に対して不屈きな所行に及んだためにアランとの間に決裂を生じたという臆説をもとに、ポオの人間性に汚辱を印するような記事を綴り、しかもその部分を故意に韜晦することによってそのかげにある醜い真相を読者に勝手に想像させるような卑劣な手段に訴えている。ポオドレーはそれが真実か否かを確かめることが出来ないままに、その悪質性を看破して削除したのであるが、この点に関しては、ポオの擁護者の一人であった N.P. ウィリス N.P. Willis がダニエルの中傷への反論として、*Home Journal* にポオを子供の頃からよく知っていた寄稿者の手記を載せた。<sup>1</sup> 彼はダニエルの描いたポオは「おそるべきカリケチュア」であり、ダニエルの記事は「残酷な誤まった描写にみちている」と非難し、修正を試みている。この点から見てポオドレーの直観による修正は正しかったことになる。

ポオドレーは 1856 年版「ポオ論」では 1852 年版中の作品論を全部削除して、ポオの作品全体に対する短かい論評をもってこれに代えているのにすぎない。初稿の作品論は構成・内容ともに奇妙に均衡を欠き、不必要に長い二三の作品からの引用と説明が目立つ。ポオドレーほどの犀利な批評家なら当然もっともその本領の才幹の筆をふるうべき作品論の部分もダニエル及びトムソンの記事に依拠していることが明らかである。この批評の部分を検討するに及んで彼がレッドフィールド版「ポオ著作集」を入手し、これにもとづいて初稿「ポオ論」を書いたという定説は全く覆される。この中でポオドレーが言及しているポオの作品集は「怪奇と幻想の物語」*Tales of the Grotesque and Arabesque* と、ウィリー・プトナム版「作品集」の二つだけであり、1850 年刊のレッドフィールド版「著作

<sup>1</sup> “Estimate of Edgar A. Poe,” *Home Journal*, March 30, 1850.

集」をあげていないのは何故か。ボオドレーは第二の翻訳「ベレニス」の序文の中でも作品集はこの二つしかあげていない。このことも「著作集」依拠説の反証となりうる。のみならずこの作品論を書いた時点でボオドレーが読んでいたポオの作品は極めて限られたものでしかなかったと推定することが可能である。

ボオドレーは詩人としてのポオより物語作家としてのポオにより魅了されていたので、詩作品より物語の方に力点をおいているのは当然である。「ポオ論」の中で言及されている詩作品のうち「アナベル・リー」と「鐘」はトムソンの文章中に引用されているので、ボオドレーがこれら二篇の原詩を読む機会があったことは確かである。あとの詩は「ヘレンに寄せる」、「大鴉」、「ウラリュウム」、「夢の国」のみであり、これらはダニエルの文章の中で言及されている作品以外のものではない所を見ると、ボオドレーが1852年以前に読んでいた詩は殆どなかったといっても誇張ではないであろう。

物語でボオドレーが採り上げているのは「こがね虫」、「大渦に吞まれて」、「モルグ街の殺人」、「催眠術の啓示」、「エイロスとチャーミオン」、「群集の人」、「黒猫」、「ベレニス」、「アーサー・ゴードン・ピムの物語」で、最後に「ユリーカ」に触れている。この中最初の六篇は1845年刊「作品集」の中に含まれた物語であり、彼の「催眠術の啓示」の訳はこれを底本としたもので、彼がこの「作品集」中の作品を全部読んでいたことは確かである。又ポオが編集に携わっていた頃の「南部文学通信」の二年間分を持っていたことは「ポオ論」中の彼自身の言によって明らかであり、「ベレニス」の訳は1835年三月号に載った作品にもとづいたものである。従ってこれらの作品に対する批評はボオドレー自身の批評であることに間違いはない。「ピム物語」と「ユリーカ」はふたたびダニエルの記事に依存しており、とくに「ピム物語」の方は長い引用文まで借用している所を見ると、この二篇をボオドレーは読んでいなかったと判断できる。

このように1852年版「ポオ論」は大部分が二次的材源にもとづいて書かれたために全体として甚しく不揃いで散漫なものとなっているが、ポオ

ドレールはその後入手したレッドフィールド版「ポオ著作集」にもとづいて初稿を全面的に書き改め、加筆することによって、ポオドレール独自のポオ論を完成することとなる。彼は初稿「ポオ論」に関してプーレ・マラシ Poulet Malassis あての手紙の中で「ぼくはアメリカの大作家についての長い論文を『巴里評論』で公けにしました。が最初が最後になりそうです。ぼくの論文は恥かしいものです<sup>1</sup>」と述べているのは以上のような「ポオ論」の成立に対する反省の表明なのであろうか。

しかしながらポオドレールがダニエルの原文を修正加筆した部分や、彼が挿入したオリジナルな見解には、ダニエルには出来ないポオの資質へのすぐれた心理的洞察がなされていることが分る。たとえば初稿には「ウィリアム・ウィルソン」の中のブランズビー氏の陰鬱な学校の環境を描写している章節が長々と引用されているが、ダニエルの引用した部分と同一であり、恐らくポオドレールはこの作品を読んではいなかったと思われる。もし彼が読んでいたら、「黒猫」と同様にその〈深遠さ〉が彼を烈しく魅了せずにおかなかったであろうこの物語の内容については全く言及していないからである。にも拘らずこの引用文の前後に加えられているポオドレールの文章は、この引用文の部分がポオの自叙伝的描写であることを知り、環境が少年期の精神形成にどのような役割を果すかという一般論的考察から始めて、いかに鋭い想像的直観と内観力によってポオの人間的資質を見ぬき、これを見事に描いているかを示している。

あなた方はこの章節を何と思われるだろうか。この異例な人物の性格がすでに幾分かあらわれていないだろうか。私はといえば、この学校生活の描写からくらい香気が立ちのぼるのを感じる。そこに陰鬱な幽閉の年月の戦慄がながれているのを感じる。監禁の時間、弱々しい見すてられた幼年期の不安、われわれの敵である先生への恐怖、残酷な友達への憎しみ、心の孤独、こうした少年期の苦しみのすべてを、エドガア・ポオは免がれている。このようなすべての憂鬱の元となるものも彼を征服しなかった。若くして彼は孤独を愛する。というよりむしろ彼は自分が孤独とは感じない。自分の情熱を愛しているからだ。幼年期の創意にみちた精神がすべてを快適にし、すべてを輝かせる。意志力と孤

<sup>1</sup> Baudelaire, *Lettres 1841-1866* (Paris, 1906), pp. 33-34.



独の誇りが彼の人生に重要な役割をはたすだろうことがすでに見てとれる。実際、彼は苦悩を愛してさえいる。それがこれから先の人生の切り離しがたい伴侶たることを予見し、そして若い劔闘士のように渴望にみちてそれを求めているといえないだろうか。あわれな子供は父も母もないが、彼は幸せなのだ。彼はカルタゴのメダルのように深く刻印を押されることを誇りに思っている。

これは作品評というものではない。しかしこれはボオドレールがポオの中に精神的血縁を見出した証しとして、ポオに自らなり切った所から生み出された一時期のポオのすぐれた内的風景の再現であり、また同時にリヨンの兵営に似た中学の寄宿舎生活、ガス燈にうるむ霧ふかい町、先生への反抗、学友との校庭での喧嘩等という憂鬱な点景に綴られたボオドレール自身の青春の自画像でもある。想像力による対象への自己投入によって生命的なものを損なうことなく把握し再現することのできる詩人の能力は到底ダニエルの及ぶ所ではなかった。

ボオドレールが 1856 年版「意想外の物語」の冒頭に「この訳をマリア・クレム夫人に、熱誠と献身の母君に、詩人がこの詩を寄せた人にささげる」という献辞と共に、ポオの「わが母に寄せる」To My Mother の訳詩をかかげていることは周知であるが、クレム夫人のポオにたいする献身的な愛情と奉仕について、ボオドレールはダニエルが引用した N.P. ウィリスの文章によって初めて知ったものと見てよい。ボオドレールは「ポオ論」の中でこの全文を引用して過度な迄の讃辞をクレム夫人におくり、さらにこのような高貴な献身的な愛を人の心に起させることのできたポオの人間性の魅力に言及している部分もボオドレールのオリジナルな文の中で目立つ点である。彼は 1854 年七月二十五日の「祖国」Le Pays にふたたびクレム夫人への献辞を寄せて、

今日私の心をとらえるのはただ彼の立派な作品を世に示す喜びだけではなく、彼にとっていつもあれほどまで親切でやさしかった婦人の名前をその上に書き記す喜びでもあるのです。あなたの愛が彼の傷口をみとるように、彼はその栄光であなたの名前を香わしく不朽なものにするでしょう。

と、あの傲慢なボオドレールが世にも謙虚な真情にあふれた手記を公けにしている。ボオドレールのクレム夫人にたいする過度な讃美の念は、彼の

偶像であり、殉教者であり、また彼自身でもあったポオの傷口をいやす聖なる母への礼讃というべく、さらには彼の期待に背いてオーピック夫人となった母にたいする、見すてられた息子の代償愛への欲求の現われでもあろう。ここにもポオと合体し、ポオになり代ったボオドレールのナルシシズムの濃厚な匂いが感じられる。

尚「ポオ論」の第二部でボオドレールが言及しているポオの飲酒癖についての擁護の弁は甚だボオドレール的で興味深い。ポオの飲酒は生活苦や孤独や屈辱感や労作の緊張から逃れる手段であり、酩酊の昂揚の中で見いだしたすばらしい幻想や絶妙な観念を再び経験したいという欲望に抗しえないからだというユニークな発想が見られる。これは1856年版「ポオ論」で「酩酊は一つの記憶法」であり、「詩人は注意深い文学者が覚え書きのノオトを作ることにつとめるように酒をのむことを覚えたのだ」という彼一流の飲酒論へと発展する思想の萌芽となっている。

このように初稿「ポオ論」では粗笨な作品評以外の部分にむしろボオドレールの独自の発想や解釈が見いだされ、ダニエルが豊富な材源を提供しながら彼自身は処理しえなかったポオという人間とその体験を彼一流の感情移入と心理的洞察によって内面から浮彫にする事が出来た。その限りにおいてやはりボオドレールの「ポオ論」であることに変わりはないのである。